

マーケティングにおけるシステム理論

SYSTEM THEORY IN MARKETING

二 瓶 喜 博
YOSHIHIRO NIHEI

1. はじめに

Theory in Marketing の第一集は、マーケティング理論を真正面から取り上げた最初の書であったと言える。この書が出版されて14年ののち、第二集が公刊された。第一集と第二集の双方に編集者として加わった Reavis Cox は、第二集の Introduction の中で、マーケティング理論確立のための協働的努力の、約20年にわたる流れを概観して、「われわれは、一体何をなしとげたのだろうか？」と問い、第二集に掲載された諸論文の検討を加えつつ、次のように述べている。

「第一集から第二集へと、確かに洗練の度合は向上した。しかし、依然として不確かさと混乱があり、理論体系の形成からはほど遠い。」⁽¹⁾ しかも現状は、「役に立つ理論という要請——つまりは、事実を変造する諸仮説の定式化に向って歩を進めている。」⁽²⁾ のであると。

一方、こうした背景の中で、複雑・多様、かつきわめて動的なマーケティング活動を、一つの統一的全体として把握し、しかも、こうした複雑性のゆえにマーケティングは、きわめて折衷的 (eclectic) な学問的性格を持つもの⁽³⁾ であるが、このような諸学に関連的なアプローチを統合するための方法的基礎として、マーケティングにおけるシステム・アプローチが、E. J. Kelley と W. Lazar によって主張された。

この小論においては、マーケティング理論確立への諸努力とその混迷といった状況克服への期待を託されたシステム・アプローチの、方法論としての検討を行なっていきたいと考える。

2. 非体系的体系論

今日システム・アプローチは、「一般的な思考様式としての意味をヨリ強くもたされているのである」⁽⁴⁾ が、このような思考様式としてのシステムの把握は、さまざまな学問分野の内部から生じてきたものであり、システム・アプローチが登場してくる内的背景としては、「分析の時代」から「総合の時代」へという認識上での移行が必然的となってきたこと、すなわち、ボールディングが示す3つの徴候による、統合への衝動が生じてきたことであろう。ボールディングによれば、1) 雑種型の専門分野の発展、2) 専門化された学問分野を横断する応用部門の発達、3) 純粋理論の分野にあってさえ、純粋な学問分野の狭隘なモデルに対する不満がますます増大している徴候の3つである。⁽⁵⁾

そして、当然に、こうした統合への衝動の典型として、マーケティングを考えることができるだろ

う。

ところで、システム理論そのものの性格は、それが持つと考えられる（あるいは期待される）大きな可能性のゆえに、きわめて多義で、しかも混乱した概念となってしまうことも否定できないだろう。田村正紀氏の言うように、「おそらく、現代マーケティング論における最大の不幸の一つは体系概念が非体系的に用いられていることであろう」⁽⁶⁾。

これは何もマーケティングにおけるシステム・アプローチだけに限られた問題ではなく、さまざまなシステム・アプローチに共通して横たわる問題でもある。ボグスロウは次のように述べている。「言葉が、その本来持っている意味からはずれた逸脱した意味でまかり通ることが往々にしてある。われわれのいまの時代における意味論的逸脱の、はなはだ関心を持たざるをえないところのものの一つに、「システム」なる語がいわれるときの意味合いがある。かなり振幅のひどい、いろいろと違った意味のこめ方が行なわれているのである」⁽⁷⁾。

このように、今日システム・アプローチは、幾多の漸進的成果とともに、ボグスロウなどによる、内在批判ともいべきものもまた、生みだしているのである。

ボグスロウは、システム・アプローチをアテチョコの実にたとえているが、これは日本的に言うならば、さしずめラッキョウの実ということが出来るかもしれない。ラッキョウの皮をむいていくと、ついには何もなくなってしまう。一体芯はどこにあるのか。彼は、その著書“New Utopians”の中で、過去から現在に至るさまざまなシステム・アプローチを、あたかもアテチョコの実をむくように、丹念に検討している。そして、いかなる結論的なことをも、彼は提示しえていない。ついに彼は、芯を見つけ出すことはできなかったのだ。

システム・アプローチは、かくの如く捕捉し難い概念であるように思われる。サイモンは、次のように述べている。「システム・アプローチということばを定義することは、オペレーションズ・リサーチよりも容易ではない。なぜかという、それははっきりした理論であるよりは、むしろ一組の態度およびマインドだからである。漠然としたかたちでいえば、問題全体を見るということの意味し、そのほかに新規なアイデアがほとんどあるわけでもなく、また役に立つアイデアがあるわけでもない」⁽⁸⁾。（傍点二瓶）また、カーシュナーは、次のように述べている。「“システムズ・エンジニアリング”とか“システムの最適化”といった表現におけるシステムという言葉は、非常に定義しにくい概念である。システムとはきわめて広い意味を含んでいる言葉であって、これを定義するためには、さらにより一般的な言葉を使わねばならず、かえって理解しにくくしてしまうように思われる。というのは、同義反復・循環なしに言葉を定義することはほとんど不可能に近いし、また“システム”という言葉は、定義を下さずに、むしろ使っているうちにその意味が明確化する種類の言葉と思われるからである」⁽⁹⁾。（傍点二瓶）このように、システム・アプローチは、きわめてプラグマチックな色彩を帯びつつ展開されているように思われる。ボグスロウは、こうした状況を、「一つだけ、はっきりしているようにみえることがある。システムなる語は、違った人びとが、違った考えをコミュニケーションするのに用いられているということであり、これだけは、はっきりしている。」と述べ、かなり独特な

やり方ではあるが、今日のシステム・アプローチに見られるさまざまな性格を、次のようにうまくまとめている。1)結合させようという考え、2)コントロールしてやろうという考え、3)インターディシプリナリーな考え方、4)大観 (big picture) の考え、5)有機体という考え方⁽¹⁰⁾。

しかし、田村氏の述べるように、「マーケティング理論家は彼の世界におけるシステムズを認識するためにシステム・ズアプローチに頼ることはできない。彼に必要なことは彼自身の経験の世界に沈潜することによって、マーケティング・システムズを成立させる諸契機を注意深く洞察すること」である⁽¹¹⁾。つまり、システム・アプローチを、より明確なかたちで把握するためには、少なくとも、この「態度およびマインド」の世界にまで立ち入らなくてはならない。すなわち、ベルタランフィの言う、システム認識論の問題にまで立ち入らなくてはならないのである。なぜなら、「このプラグマティックな哲学の厄介な点は、それが正しいということ、絶対に正しいということである——というのは主としてそれが無内容だからである。」⁽¹²⁾

3. システム認識論

ベルタランフィは、今日のシステム・アプローチの状況を概観して、次のようにまとめている。

彼は、一個の「パラダイム」として「一般システム論」に広い意味を付与し、自らが提唱した一般システム論の概念の、その後の発展——これによって「システムの見方の必然性」を示しているのだが——をまとめて、「内容的には分けられないが目的において区別できる三つの主要な側面があることが示せる⁽¹³⁾」と述べている。

「第一のものは、『システム科学』とでもいうべきもので、要するにいろいろな科学における『システム』の科学的な探究と理論、およびあらゆるシステムに適用できる諸原理の教義としての一般システム論である。」こうした動きの根拠となるのは、「各種『システム』に共通する一般的な側面と対応関係と同形性とがあることがわかってきた」という認識である。

「第二の領域は『システム工学』である。すなわちコンピュータやオートメーションや自己制御装置などの“ハードウェア”と、新しい理論展開と新しい理論体系などの“ソフトウェア”の両方を結びつけるという、現代の技術と社会の中で生じている諸問題である。」

「第三には『システム哲学』がある。これは思考と世界観の改変であって、新しい科学的規範として（古典科学の分析的、機械論的、一方向因果関係的の規範に対比して）『システム』を導入することから生じた結果である。展望をもった科学的理論はすべてそうだが、一般システム理論も『形而上学的』あるいは哲学的な側面をもっている。『システム』の概念はトーマス・クーンのいう新しい『パラダイム』、あるいは著者（ベルタランフィ）の名づけた『新しい自然哲学』を構成するものであって、機械論的世界観のいう『自然の盲目的な法則』とか阿呆が物語るシェクスピア劇のような世界過程に対するに、『偉大なオーガニゼーションとしての世界』なる有機体論的展望をもってするものである。⁽¹⁴⁾

そして彼は、認識について次のように述べる。「認知は『実在のもの』（その形而上学的な位置づけ

は何であれ)の反映ではないし、知識は単に「真理」や「実在」への近似ではない。それは知るものと知られるものの間の相互作用であり、これは生物的、心理的、文化的、言語的、等々の性質をもつ多数の要因に依存するものである。⁽¹⁵⁾」(傍点二瓶)

つまり、ここでは認識の相対性を述べているのだが、こうした認識は、人間の意識(主観性)を重視したものであり、彼自身の言葉を用いれば、「人間主義的」な見方であると同時に、きわめてブラグマティックな色彩を持つものといえる。⁽¹⁶⁾

W・ジェームズは、リスの話を用いて、こうした認識の主観的性格をうまく説明している。

「一匹の生きているリスが木の幹の一方の側にくっついていてと仮定し、その木の反対側にはひとりの人間が立っているものと想像する。リスを目撃したその人間が木のまわりをすばやく駆け廻ってリスを見ようとするが、彼がどんなに速く廻っても、それと同じ速さでリスは反対の方向に移るので、リスと人間との間にはいつでも木が介在していて、そのためにリスの影も形も見られない。かくしてここに、その人間はリスのまわりを廻っているのかどうかという形而上学的な問題が起こってくる。その人が木のまわりを廻る、これはもちろん確かなことである。そしてリスは木にとまっている、しかし彼はリスのまわりを廻るのかどうか?……どちらが正しいかは、リスの『まわりを廻る』ということを諸君が実際にどういう意味でいっているかによって定まることだ。……諸君が『まわりを廻る』という動詞を実際的にどう考えるかにしたがって、諸君はどちらも正しいといえるし、またどちらも誤っているといえよう。⁽¹⁷⁾」

このようにジェームズは、認識における主観的要素、したがってその操作性を強調した点で重要である。

世界とわれとの関係は、結局「知るもの」によって、あるいはまた「見るもの」によって、「知られるもの」あるいは「見られるもの」が現前するのである。あらゆるものが意識を通して現象するのであり、したがって、目の前にあるコップは、私にとってのみそうしたコップとして現象するのであって、私のコップの認識は、そのようなコップの認識であるに他ならない。そして、このような意味合いにおいて、コップは一つのかげがえのないコップになったり、とるにたらぬコップになったりするのである。

ペルタランフィは、このように「全体」を、「知るものと知られるものの間の相互作用」として、すなわち主観的操作において捉える。「私たちは科学を、生物的、文化的、言語的才能と足かせをもった人間が彼の『投げこまれた』世界、あるいはむしろ進化と歴史によってそこにうまく適応しているその世界に対処していくために創りだした『いろいろな遠近画』の中の一つであると見るのである。⁽¹⁸⁾」

このような、認識における主観的操作を重視する背景には、近年におけるさまざまな分野での相対性の発見が関与している。ペルタランフィは、大きく「カテゴリーの生物学的相対性」と「カテゴリーの文化的相対性」とに分け、それぞれの例として、人類学におけるウォーフの見解と、ユクスケルの「環境学説」を掲げている。

ウォーフによれば、「言語パターンこそ個人がこの世界で何を感じ、それについてどのように考えるかを決定するものである。これらのパターンが幅広く変化するために、異なった言語体系を使用するグループでは思考と認識の方式によって基本的に異なった世界観を生みだすのだ。」⁽¹⁹⁾したがって、「ニュートンの空間、時間、質料は直観的なものではない。それらは文化と言語からの授かり物である。」⁽²⁰⁾

一方、ユクスキュルによれば、「どの生物も、周囲の対象の多重性から少数の特徴をいわば切りとって、それに対して反応し、その特徴の総体がその生物の「環境」を形づくる。残りはすべてその生物にとって存在しない。」⁽²¹⁾

4. 実在と思弁

こうした相対性の発見は、一つには、重要な問題であるが、「他者性の発見」にかかわっており、もう一つが、これまでみてきた「主観的操作」の問題にかかわるといふ二重の意味を持ってくる。両者は相互に深いかかわりを持つものであるが、ここでは後者の問題にしばって考えていきたいと思う。

ベルタランフィは、このような相対性を、「実在システム」と、実在に対応する概念システムとしての「抽象システム（科学）」との相関関係として捉える。前者は、システムマテイクな実在であり、後者は、システムとして見た実在である。そして、この相関関係は、次のようなアインシュタインの言葉によってうまく示されているように思う。「私は即自的な宇宙、つまり法則によって管理されている宇宙があると信じており、その法則を荒っぽい思弁という仕方で捉えようとしているのである。」⁽²²⁾つまり、ここでアインシュタインは、「思弁と実在、われわれの宇宙像と宇宙との出会い」（傍点二瓶）を表現しているのである。しかも、「それらは決して感覚のデータとか単純な知覚として単に『与えられる』のでなく、ゲシュタルト力学および学習過程から、実際に私たちが何を『見る』か何を感じるかを大部分決めてしまう言語的、文化的要因にいたるまでの莫大な数の『心的』諸要因によって組上げられたものなのだ。」⁽²³⁾

思弁とは、「足かせをもった人間」の思弁であり、偉大なるアインシュタインの「小指」⁽²⁴⁾なのである。

このような人間の主観性を認識することによって、彼は、あらゆる絶対的な真理との最後の環元という大それた考えを排除し、科学を、見方（perspective）に依存する相対的なものであるとして、「遠近法主義（perspectivism）」という「つつましい見解」⁽²⁵⁾を採るのである。そして、この「遠近法主義」のもとに、人間と世界とのかかわり合いの全体を、統一的に把握しようとするのである。つまり、こうした主観性を認識しつつ、しかも、あえてこうした主観性のもとに、全体を見ていこうとする。すなわち、「システム哲学は、人間と世界の関係すなわち哲学用語でいういわゆる価値とかかわってくることになる。もし実在が、オーガナイズされた全体の階層構造物であるのならば、そこでの人間像は偶然の出来事で支配される物理学的粒子が究極的で唯一の『真なる』実在であるような世界

におけるそれと異なったものとなるだろう。むしろ、記号や価値や社会的なものや文化の世界こそきわめて『真なる』何ものであるのだ。そしてこれが宇宙の階層秩序の中に埋め込まれているという事態は、C. P. スノーのいう『二つの文化』の対立、すなわち科学とヒューマニティ、技術と歴史、自然科学と社会科学、その他何にせよこうした図式に描くことのできる対立の間に橋をかけるのに好適な状況である。⁽²⁷⁾しかし、事はそれほどうまくいくものだろうか。

5. 概念の操作から実在の操作へ

以上のようにシステム理論は、このような認識論的特性、すなわち、主観的な概念操作という性格に基礎づけられているということができよう。また同時に、このような主観性の認識は、近年の諸科学における展開の必然的な帰結ということができ、こうした認識論的特性が、先の「態度およびマインド」というサイモンの表現が合意する内実である。

このような認識に裏うちされて、一般的に次のように定義される。「システムとは、組織された、または複合的な全体であり、それは、複合的ないし単一的全体を形成する事物または部分の集合体ないし結合体である。」⁽²⁸⁾ベルタランフィも同様に次のようにまとめている。「システムもしくは『オーガナイズされた複雑性』は『強い相互作用』あるいは『無視できない』相互作用、すなわち非線形の相互作用の存在によって区別される。」⁽²⁹⁾「古典物理学はオーガナイズされていない複雑性に関する理論の展開にいちじるしい成功をおさめた。……しかしそれと反対に、こんにち基本的な問題となっているのはオーガナイズされている複雑性の問題だ。オーガニゼーション、全体性、目標指向性、目的論、分化などの概念は伝統的物理学とは異質のものである。けれども、これらの概念は生物科学、行動科学、社会科学のいたるところでちょいちょい顔をだし、じっさい、生物体や社会的集団を扱うにはなくてはならないものである。つまり現代科学に課せられた根本問題の一つはオーガニゼーションに関する一般理論なのだ。一般システム理論は、原理的にいって、そのような概念に正確な規定を与えることのできるもの、また、うまい場合には、それらを定量的な解析にもちこむことのできるはずのものである。」⁽³⁰⁾

カーンは、システム理論について、「一つの枠組みであり、メタ理論であって、使い古された言葉でいえば、そのもっとも広い意味で、一つのモデルというべきであろう」と述べているが、このような考えは、「パラダイム」としての把握とともに、「オーガナイズされた複雑性」という実在に対する認識上の操作をこえて、実在への能動的アプローチ、あるいは操作の可能性を潜在的に含意しているように思われる。これが「使っているうちにその意味が明確化する」ことの内実である。

主観性において、つまりは操作性においてシステムを認識するということは、当然に操作を規定する「目的論」的性格を不可欠とするし、それゆえ必然的に実在を、目的においてオーガナイズされたものとして概念するのである。ここにおいて、目的論的認識は、目的論的能動性（操作）へと、いわば自然的に流れていく。

こうした目的論的性格（それと相即する目的論的操作性）は、サイモンにおいてはよりはっきりと

した形であらわれている。彼は、諸科学を「人為性の科学 (The Sciences of the Artificial)」⁽³²⁾としてとらえ、人為的世界の創造という意味合いをこめて、「デザインの科学」を主張する。「合成的対象あるいは人為的对象、極端に言えば願望する財をふまえた将来に向かっての人為的对象が、エンジニアリング的活動と技術の中心的对象なのである。そこでエンジニアは、ものごとをいかにあらしめるべきかに関心をもつ。それも目標を達成させるにはとか、そのためにはどのように機能させるべきかということにかかわりをもつ。」⁽³³⁾そして、このような人為的世界の創造という能動性において、「複雑性に関する手法と知識全体を大きく発展させるためというよりも、複雑性の総合と解析に対する回答を提供できるという点で意義がある」とする「システム研究の普遍性」⁽³⁴⁾を主張するのである。そして「そのようなデザインの科学は実現可能であるし、すでに現実のものとして形成されつつある。……工科系の学校ではとくにコンピュータ科学や『システム・エンジニアリング』を通じて、またビジネス関係の学校では経営科学を通じて、すでにそれは浸透しはじめている」⁽³⁵⁾と述べている。

ベルタランフィもまた、このような能動性において、「人間と世界の関係」に思弁において「橋」をかけるだけでなく、実在への適用(力)としても「橋」をかけうると考えているようである。「人間をも含めてすべての生物は、単なる見物人ではない。すなわち世界の舞台をただ眺めているだけで、それゆえ神や生物進化や文化の『魂』や言語が気まぐれに彼の形而上学的鼻先にのせてくれためがねを、像がどんなに歪むしろものでも自由に掛けていていい、というものでない。むしろ彼はドラマの反応者であり能動者(役者)なのだ。」⁽³⁶⁾そして、このような主観的・操作的能動性の「真なる」ことを保証するのは「動物や人間が現在存在しているという事実がすでに、彼らの経験の形がある程度実在に対応していることを証明している」⁽³⁷⁾という認識に他ならない。「経験が生物にその存在を続けさせるような形で導きを与えるためには経験世界と「実在」世界との間に一定程度の同形性が存在することで十分である。」⁽³⁸⁾彼は、このような実在に対する「一定程度の同形性」と「存続」における能動的関係によって、「足かせをもった人間」的主観性と実在との間に、概念操作においてだけでなく、実在への操作性においても「橋」をわたすのである。

しかしながら、たとえこのように世界が人間の主観性において現前し、現象するとしても、このことをもって概念の操作性を実在の操作へと、そのまま結びつけることは原理上できないはずであり、「一定の同形性」のもとに「存続」してきたことは、こうした実在の操作を「真なる」ものと保証する根拠はどこにもない。このことの正当性は、昨今の公害問題と照らし合わせて考えると、自明のことであろう。アナトール・ラパポートは、この点に関し次のような「つまましい見解」を述べている。「われわれは科学万能という信仰の時代に生きている。この信仰を支えているのは、科学者が解決をたのまれる問題の大部分は科学者自身によって選ばれたものだという事実である。」⁽³⁹⁾

このような「実在の操作」への移行をアプリオリに許容するものは、人間的主体性を深く認識すると同時に、そのような主体性を、それこそシステム論の排する当のカントのように、人間にアプリオリに普遍的なものと想定してしまう——つまり、相対性を絶対視する態度であり、このような性格は、ラパポートの次のような言葉においてより明確である。「操作主義者は人間の経験に共通の基盤

を仮定する。すべての人に太陽は明るく雪は白い。この仮定を進めて、人間の要求の共通の基盤を仮定する。すべての人は健康を求め、他の人と仲間になりたいと求めると。したがって操作主義者は、一般の要求を満足させる方法や手段に基づく一般的な価値体系を構成できると信じている。⁽⁴⁰⁾そして、このような超越者的アイデンティフィケーションを容認するものは、形而上学的「信念」のみならず、実証主義的な帰納と関係があると考えられる。

メルロ・ポンティは、フッサールの考えにそいながら次のように述べている。

「ガリレイは、物体落下について彼が掘りどころとした考え方を、事実のなかから発見したのではありません。彼はそれを、自分から進んで考え出し、組み立てたのです。……フッサールは……物理学者の操作は『事実のうちに基礎をもつイデア化的虚構』だと言っております。ニュートンの法則を例にとってみましょう。フッサールの言うには、この法則は重力によって引っぱられる物質塊が〈実際に存在するかどうか〉というようなことは少しも言っておりません。ここでもまたイデア化的虚構によって、重力によって引っぱられる物質塊とも言うべきものを〈純粋な形で〉構想し、もしそうしたものが存在するとすれば、それはいかなる性質をもつはずかということを規定しているのです。ニュートンの法則は事実存在については何ごともしらず、ただ『重力によって動かされる質量そのものはどんな性質をもつか』を論じているだけだ、とフッサールは述べております。……帰納的操作にその蓋然的価値を与え、イデア化的虚構をして本当に事実のうちに足場をもつものたらしめてくれるのは、結局のところ、それを裏づけるために引き合いに出される事実の〈数〉ではなく、このようにして鑄造された理念が、理解さるべき当の現象に投げかける〈固有の明るさ〉なのです。……結局のところ法則とは、ある〈力〉をもち、さまざま事実を統御するような〈実在〉ではないのです。マールブランシュの言葉を借りて、それは〈光〉であって〈力〉ではないのだ、と言ってよいかもしれません。」⁽⁴¹⁾

コントは、その「実証精神論」の中で、⁽⁴²⁾実証的という語に、「現実性」「有用性」「確実性」「明確性」「建設性」「相対性」の六つの属性を与えているが、このような実証性は、先のメルロ・ポンティが述べるような認識——すなわち、帰納的操作とか法則というものは、結局は概念から実在へと向けられた〈光〉であって、〈力〉ではないという認識を欠落した場合、つまり実在を（顕在的にであれ潜在的にであれ、また、実際にであれ理論上であれ）操作する〈力〉となったとき、漸進性とか「有用性」といった単なる功利主義に陥る危険性を身に引え受けなければならないはずである。先の Cox の言葉は、このような危険性に対する警告でもあるのだ。

このような操作の両義的性格は、先に述べた、主観的操作に相即する目的性において、概念（主観すなわち光）と客観（客体）とを統一的な体系として、アブリオリに容認するという、もう一つのより形而上学的な操作を行なうことから生ずる。あとでまた述べるが、Alderson の、目的論的体系と生態学的体系という「組織された行動体系」の二側面は、主体的見方と客体的見方という二様のものであり、こうした第二の操作なくしては統一しえないものである。そしてこれは、Alderson が方法としてとった、新明正道氏の指摘するパーソンズらの社会学的機能主義（⁽⁴⁴⁾構造的機能的分析）の特徴

でもあるのである。村田昭治氏はこの点について「今日では、この機能主義がシステムズ・アプローチへの展開の基礎となり、マーケティングへのシステムズ・アプローチの適用はこの機能主義の昇華された形態であると理解してよいであろう⁽⁴⁵⁾」と述べている。

このような特徴については、たとえば修士論文においてとりあげたバーナードの組織論においても指摘できる。彼は、組織を「意識的に調整された人間された人間の行動や諸力のシステム⁽⁴⁶⁾」という認識のもとに、次に、認識客体としての組織を構成する人間についての仮説をもうけることによって第二の操作を行なったのであり、しかもこの第二の操作の根拠となったのが、アプリオリな「信念(faith)」であったのである。

結局のところ、いかに「客観的に検証しうるものに改造⁽⁴⁷⁾」したとしても、「それを裏づけるために引き合いに出される事実の〈数〉」では、この主観的操作(思弁)と実在との距離を、われわれは埋めることはできないのである。それゆえに「科学的方法とは、テストされた方法というように限定され、それゆえテスト可能である仮説；そして、こうした意味合いでのテスト可能とは、経験的事実と比較すると、事実の変造を意味する⁽⁴⁸⁾」と、Cox は指摘するのである。

6. 確立された状況

このような実在と思弁との両義的關係、特に実在への操作性について、明示的ではないが、ボグスロウは、「確立された状況」と「突然現出状況」という概念を用いて、システム・アプローチの特性を分析している。これは、要因の確定という操作をとまなうアプローチを「確立された状況」を想定し、そこにおいてのみ働くものであるとして、実在そのものとしての「突然現出の状況」と対比してみせたのである。

彼は、先のラパポートと同じような意味合いで、「ニュー・ユートピアンは人と物のそのときの組織のすでにわかっている範囲を扱うようにデザインされている。そして、そのときのある事態を改善しようとする⁽⁴⁹⁾」と指摘し、(1)形式主義的アプローチ、(2)ヒューリスティック・アプローチ、(3)作業単位アプローチ、(4)コレ専門(ad hoc)アプローチ、といった彼流の分類で、さまざまなシステム・アプローチについて検討を加える。そして、これらのアプローチが、例外なく「確立された状況」に向けられたものであり、「時々刻々起きる適応修正(アジャストメント)のための機制を、それは提供してくれない。そして、体制がほとんど間髪を入れずに、旧式になった目的の達成に向けて働きだしてしまうという、まさに現実的な困った問題を導入する⁽⁵⁰⁾。」そして、結局「自体の関係において、そのもの・が・現在・そうで・ある・ところのもの(that which is)を表現し定義するということは、(実はそのこと自身)現実を歪曲し変造していることなのである。現実、事実の論述や述語で成文化されるところのものとは違って、それ以上のものである。」つまり、よく言われるような「全体は諸部分の合計以上のものであるのではなくて、むしろ「合計とは違うのである⁽⁵¹⁾」そして、こうした認識は、マーケティング理論の展開を見守りつづけてきたCoxの述懐と、びたりと合致する。

7. マーケティング方法論としてのシステム理論

世界は、われわれの意識において、そこにおいてのみ現前する。あらゆる思弁が——物理学の体系すらもが人間の主観の操作によるものであるという認識、つまり「私たちがその理論体系の中でつかまえている実在のどんな性質も、認識論的な意味で人為的なものであり、それは生物的、文化的そしておそらく言語的要因によって決定されているのだ。」⁽⁵²⁾ 極端な 比喩 を用いるならば「ピレネー山脈のこちら側では真理であることが、向こう側では誤謬なのだ。」⁽⁵³⁾

しかしながら、このような相対性を認識しつつ、しかもそうした種々の思弁を統一的に把握しうる方法的基礎として、一般システム論は想定された。なぜなら「全体は部分によって輝く」⁽⁵⁴⁾ はずであるからだ。

しかし、一方このようなすぐれた“思弁”によって輝く全体は、そのまま実在であることはできない。なぜなら、光輝く全体も「足かせをつけた人間」による「小指」ほどの確証でしかないからだ。われわれは、このような思弁と実在とを明確に区別しなくてはならない。このことはなにも人間的な実践を否定するわけではなく、むしろそのような能動性と大きな関係を持つものであることを知っている。そうではなく、われわれは、実在と思弁との実践におけるかかわり合いを、より明確にしなければならないのだ。

実在と思弁との越えがたい裂け目を認識するとき、おそらく一つには実在の概念操作ではなく、行為主体として実在そのものの中に入っていくことによって科学的たろうとする方法が考えられよう。田村氏は、Alderson の O. B. S. 再規定の検討から、Alderson におけるパースペクティブの混乱——すなわち主体の立場と第三者的立場（超越的立場）という二重のパースペクティブによる目的論的体系と生態学的体系の二側面の統一——を明らかにし、⁽⁵⁵⁾ Alderson における実証と反実証の混乱を排し、反実証に徹することによって、主体の側からマーケティングを明らかにしていこうとする。

「もし体系をあらかじめ所与のものと考えなければ、われわれは体系における主体部分を不変のまま環境の範囲を変化させることができる。」⁽⁵⁶⁾ 「解かれるべき問題はマーケティング活動が主体的要因によって規定されるかあるいは環境的要因によって規定されるかという問題ではない。多次元的なマーケティング活動とそれに影響し、またそれによって影響される諸要素全体と、それらの関連の総体、これをマーケティング行動体系と呼ぶならば、それが何であるかこそわれわれの解くべき問題というべきである。」⁽⁵⁷⁾

主体（主観性）に徹することによって、これもまた、実在と思弁の混同という誤謬を排する一つの方法であることは確かである。

また一方、実在と概念操作とを、アプリアリに連続的に捉えるような観念的なシステムではなく、実在と思弁との距離をはっきりと認識し、「実在的な問題の性質あるいは性格に関する先入見を、その基礎におかれる観察方法から排除しなければならない」とする、⁽⁵⁸⁾ 実在そのものに迫ろうとする態度においてはどうかであろうか。こうした態度を厳密化していくならば、それは、実践をはっきりと分離して、現象そのものをありのままに記述するという方法的立場になるであろう。

実在の中に、実在を形成するものとして身を置くか、それとも、実践を拒否して実在をあらゆる先験性も含めて、できうるかぎり記述する。そのことによって実在に近づくとするのか。

ベルタランフィの一般システム論は、その方法論としての性格をきわめて明確に示してくれているものといえるが、同時に、システム論一般 (systems theory) は、今日大きな問題をかかえたままであるといえる。彼の主張するシステム理論 (system theory) を生きた、実り多いものとするか、あるいは単なる観念論にとどめてしまうかは、実在との距離をどう認識するかいかににかかっているといえよう。

いずれにしても、

「人はいかに客観的たりうるのか」

「それはきみがもう一つの主観であるからだ」

そして、

「⁽⁵⁹⁾ 事実に学び、事実のただなかに身を置かねばならない」

(注) (1) Theory in Marketing, 2nd Series, P. 13

(2) Ibid., p. 1

(3) Ronald R. Gist “Marketing and Society” p. 20-21

(4) 「体系マーケティング・マネイジメント」 p. 67

(5) Kenneth E. Boulding, “Beyond Economics (「経済学を超えて」)”, p. 61-62

(6) 田村正紀「マーケティング行動体系論」 p. 1

(7) Robert Boguslaw, “The New Utopians (「システムの生態」) ” p. 49

(8) H. A. Simon, “The New Science of Management Decision (「経営におけるあたらしい意思決定の科学」) ” p. 36-37

(9) 片方善治「システム入門」 p. 11

(10) Boguslaw, op. cit. p. 50-65

(11) 三浦信「マーケティングの構造」 p. 104

(12) C. W. Churchman, “Challenge to Reason (「システム科学への挑戦」) ” p. 207

(13) Ludwig von Bertalanffy, “General System Theory—Foundations, Development, Applications —(「一般システム理論」) ” p. xi-xiii

(14) Bertalanffy, op. cit. p. xiii-xv

(15) Bertalanffy, op. cit. p. xvi

(16) 「人間中心主義」とした方が、より適切であるように思われる。

(17) William James, “Pragmatism (「プラグマティズム」) ” p. 37-38

(18) Bertalanffy, op. cit. p. xvi

(19) Bertalanffy, op. cit. p. 217

(20) Bertalanffy, op. cit. p. 219

(21) Bertalanffy, op. cit. p. 222

(22) Bertalanffy, op. cit. p. xv

(23) Maurice Merleau-Ponty, “Signes (「シーヌ 2」) p. 64

(24) Bertalanffy, op. cit. p. xv

(25) 「私は、私の皮膚のうちに深く根を下している臆見の唯一の貧弱な証人であるこの小指以外には、何一つ自分の確信を弁護してくれる論理的論証を持ち出すことができない」 Merleau-Ponty, op. cit.

p. 65

- (26) Bertalanffy, op. cit. p. 240
- (27) Bertalanffy, op. cit. p. xvi-xvii
- (28) Richard A. Johnson, Fremont E. Kast, James E. Rosenzweig, "The Theory and Management of Systems," p. 4
- (29) Bertalanffy, op. cit. p. 16
- (30) Bertalanffy, op. cit. p. 31-32
- (31) Johnson, Kast, Rosenzweig, op. cit. p. viii
- (32) サイモンにおける人為性とは、「思考というものが個人的な学習や社会的な知識伝達を通じてどのように環境に適応していくかという特性」H. A. Simon, "The Sciences of the Artificial (「システムの科学」)" p. 77
- (33) Simon, op. cit. p. 8-9
- (34) Simon, op. cit. p. 186-187
- (35) Simon, op. cit. p. 99
- (36) Bertalanffy, op. cit. p. 233
- (37) Bertalanffy, op. cit. p. 234
- (38) Bertalanffy, op. cit. p. 235
- (39) Anatol Rapoport, "ゲーム理論が教えるもの"「未来社会と数学」所収 p. 33
- (40) A. Rapoport, "Operational Philosophy—Integrating Knowledge and Action—(「操作主義哲学——思考と行動の統合」)" p. 40
- (41) M. Merleau-Ponty, "Eloge de l'a Philosophie—L'oeil et L'esprit (「眼と精神」)" p. 50-52
- (42) Auguste Comte, "Discours sur l'esprit positif (「実証精神論」)" p. 82-85
- (43) この点については、ボグスロウも指摘しており、また、ロビンソン女史も、経済学理論におけるこうした形而上学的操作について "Economic Philosophy (「経済学の考え方」)" の中で詳細に論証している。
- (44) 新明正道「社会学的機能主義」
- (45) 村田昭治「マーケティング・システム論」p. 160
- (46) Chester I. Barnard, "The Functions of the Executive," p. 73
- (47) 新明正道 op. cit. p. 111
- (48) Reavis Cox, "Theory in Marketing," 2nd Series, p. 1
- (49) Boguslaw, op. cit. p. 8
- (50) Boguslaw, op. cit. p. 138
- (51) Boguslaw, op. cit. p. 247
- (52) Bertalanffy, op. cit. p. 238
- (53) Le Manuscrit des Pensées de Pascal, (「パンセ」) p. 98
- (54) Bertalanffy, op. cit. p. 241
- (55) 田村正紀 op. cit. p. 20-33
- (56) 田村正紀 op. cit. p. 56
- (57) 田村正紀 op. cit. p. 57
- (58) 吉田修「組織モデルとシステム思考」彦根論叢 p. 40 ウルリッヒの見解
- (59) Merleau-Ponty, 「眼と精神」p. 88

(博士課程2年)